

# きほく通信

第62号

2017年  
2月10日  
発行

難病  
患者家族会

きほく

【会長】神森和子

紀の川市中三谷

【相談室】0736(75)4413

【事務局】〒649-6612 紀の川市北涌371  
森田方 TEL 0736(75)4413

## iPS細胞研究の現状

事務局 森田良恒

iPS細胞をめぐる研究成果が相次いでいます。iPS細胞とは心臓や目などあらゆる細胞に変化できる万能細胞のことです。研究の第一人者、山中伸弥教授率いる京大は、拒絶反応が起こりにくいタイプのiPS細胞を作って備蓄する『iPS細胞ストック事業』を始め、供給体制を整えています。この細胞を使えば、自分の細胞を使うより、費用も時間も節約できるのです。1人目の網膜治療は1億円かかったのですが、ストック細胞なら1000万円です。治療期間は1年から半年に短縮できるとされています。

これはiPS細胞などを従来に比べ低コストで簡単に培養する方法を京都大の末盛博文准教授らの研究グループが開発したこともおおきく貢献していると思われる。これにより昨年ぐらいいPS細胞の臨床応用に向けて研究が活発化しています。

今年に入ってから、他人のiPS細胞から網膜細胞を作り、目の難病患者（網膜色素変性症など）に移植する世界初の臨床研究について、理化学研究所多細胞システム形成研究センター（神戸市）などが2月6日、移植を受ける患者5人の募集を始めたこと発表しました。

また、パーキンソン病を治療する治験を、京都大 iPS細胞研究所が2018年度を目標に行う方針を明らかにしました。これも患者以外の他人のiPS細胞を神経細胞になる前の細胞にして、患者の脳に移植するというものです。

このほかにもiPS免疫細胞によるがん患者の免疫治療への応用、iPS心筋シートによる心臓疾患



正月は暖かかったのですが、その後厳しい寒さが続いています。そして早いのももう2月です。如月（きさらぎ）は「着た上に更に着る」ほど寒い2月だそうです。どうか体調には十分留意して下さい。

への応用、その他白血病や糖尿病などへの応用も進められていくものと思われます。本来、全ての細胞に変化できるのがiPS細胞（人工多能性幹細胞）ですからどのような病気であっても何病に限らず応用が期待できるのです。当初、iPS細胞による実用化には山中伸弥教授が2012年ノーベル賞を受賞した当時、10年以上かかると思われていたものがわずか4年後の2016年には臨床試験の承認を得ているのです。難病患者から見れば夢のiPS治療法を一日も早く実現してほしいことに変わりはありませんが、そのためにもしっかりと臨床試験を重ね、安全な治療であることが大前提であります。その日まで日々治療に専念し、希望を持って前向きに過ごしていきたいものと思います。ある難病の患者団体は山中伸弥教授率いる京大 iPS細胞研究所に毎年寄付を続けています。ある意味ただ成果を待つのではなく、患者が研究をあと押しすることは、アメリカなどで広く行われている患者協働の姿ではないかと思えます。

## 第2回膠原病友の会和歌山連絡会交流会のお知らせ

日時：平成29年3月4日（土）午後2時から午後4時

場所：和歌山ビッグ愛9階会議室C

和歌山市手平2丁目1-2

内容：第一部

ミニ講演① 「医師から見た患者会の役割」

県立医大 リウマチ・膠原病科 藤井隆夫 教授

ミニ講演② 「患者会活動について」

全国膠原病友の会大阪支部 事務局 大黒宏司さん

第二部 意見交換・交流会

助言者県立医大リウマチ・膠原病科 藤井隆夫教授

※3月2日（木）までに行事名、氏名、電話番号、参加人数を電話またはFAXで申込。

申込：和歌山県難病・子ども保健相談支援センター

電話073-445-0520 FAX 073-445-0603

担当：湯川・松尾

